

単のヲシテ 中央のヲシテ 各表現の比較と (自然科学の欠陥)

縄文哲学の骨子

単のヲシテ

国の中心のアマカミが両手を差し上げてアメ(天)の恵みを受けるだけ受けて、国民に普あまねくわかち及ぼす形。

分(か)つの連用形
分けて配る

中央のヲシテ

自分自身の自立を意味する。他人に幸せをもたらすためには、まず自分自身の自主独立の幸せがあってこそであるとする。

池田満著ホツマ辞典p189
展望社トノヲシエより引用

縄文哲学での表現

- ・ココロバ(良心)
- ・タマ
- ・ミヤビ
- ナサケエダ
- アワレエダ

タマ

中クラムワタヲ
ネコエワケ?

シ中

- ・生命維持の欲求

記紀での表現

- ・(シラス・ウシハク)

シル
(知る)

数学者岡潔の表現

- ・意識を通さない
- ・言葉で云えない

情 趣おもむきがわかる

知

意

- ・意識を通す
- ・言葉で云える
- ・浅い感情

日月神示の(キ)気

気
(キ)

気付く

意識

物質文明(自然科学)での表現

ほぼ空白の状態

「単」が少ないため、皆に「分け与える」ことが困難()

×

自然科学(分けることにより分かる)

人の肉体に備わった五感よりの刺激を「分ける」ことにより分かる=理解する

物の理ことわりのこと

つまり 自然科学(孤立系)

お金・時間への信仰の時代 シ中の暴走
岡潔

「五感で分からないものは無い
としか思えない。これを
唯物主義と言う。」

注) 心の本体が意識を下支えしている。

人が意識を失ったとしても、死んだわけではない。

注) 自然科学は孤立系であるが故に、分け与え共有することは困難。むしろ不当な収奪が現実。極端な格差状態。
お金・時間への信仰が原因。

2016.11.04

No.4/5